

「マンリキズソ」——事実と確実の禍

ズソ科

危険度：★★★★★

生息数：——

生態

ズソ科でハリガネズソの次に確認された種がこのマンリキズソである。頭部を拘束するように包み込み、上部にあるネジのような器官で全体をしめつけるように動作する。憑いたマンリキズソが十分に成長した人間の中には実際に頭痛をうったえる者も多いが、この禍が原因かどうかははっきりしていない。

この禍は科学を人間の判断基準に影響させる生態を持つ。

解説

科学というものが人間に与えた最も大きな影響は「科学的思考」である。これは「証明」という概念を人間に与え、それ以前から行われていた「騙す」という行為に対する

防衛力を身につけるに至ったのである。科学によつて人間は確実に騙されにくくなったと言える。ただし「騙す」という行為には善意によるものと悪意によるものがあり、

この「善意による騙し」までもが人間社会から失われてしまったことは留意すべき点である。「善意による騙し」とは、それまで行われていた人間が人間らしく不禍に生きるための知恵の積み重ねであり、人間関係や社会を維持するためのルールであった。それらは全て「証明」ではなく「経験」に基づいた確かな「事実」であり、また物事を「証明」などという安易な手段に頼らずに考えるための思考の要素でもあった。例えば「夜に爪を切ると親の死に目に会えない」という訓示は現代では全く意味を成さないが、照明器具が未発達で爪きりなどの道具も未発達だった時代には意味を成す「騙し」であったし、また大人になつてその「騙し」に気づいた時、危険を回避する知恵の伝達方法を学ぶことに繋がった。また先人の偉大さを感じることで自分自身に自信が持てたり、そもそも「騙し」に善意と悪意というものが存在することを身をもつて感じることもできたのである。

現代では「嘘か真実か」がすぐに分かり、それは非常に分かりやすい「善悪」として人間の思考回路を席卷した。「善意か悪意か」という最も「善悪」として有効な要素か

らこのように変わってしまったのであるから、その落差は大きいと言わざるを得ない。

対処法

この禍への対処法は分かっていない。しかし一つ分かっていることは「科学的思考」は人間にとつて必要であるということである。近代以前には「悪意による騙し」が(数として)今以上に存在した。これを減らして自己防衛できる人間へと成長させた点で「科学的思考」の必要性は確かなものであると言える。ここでその思考を放棄して元に戻つてしまえばそれは「退化」であり、人間を長年見てきた私にとっては望ましい変化ではない。ここからは「科学的思考」でもなくすことのできない「悪意による騙し」(悪徳宗教、印象操作など)をなくすことを目的にしていつてもらいたい。そうすることでいつか「善意による騙し」に自然とたどり着いてほしいと思うのである。

